

刊行にあたって

光成 歩・山本 博之

本論集は、1950年から1969年まで東南アジアで発行されたマレー語のイスラム系月刊誌『カラム』(Qalam)をもとに、脱植民地化期のマレー・イスラム世界の社会史を明らかにすることを目的とした共同研究についてまとめたものである。後述するように読者投稿欄「千一問」の日本語訳の完了により本共同研究が一つの区切りを迎えたことから、本共同研究について簡単に振り返ってみたい。

『カラム』は1950年7月にシンガポールで創刊され、創刊時からの編集・発行者であるエドルス(アフマド・ルトフィ)が1969年10月に亡くなるまで刊行が続いた。創刊して1、2年で停刊になるマレー語雑誌が多い状況で20年にわたって刊行が続いた珍しく長命の雑誌である。

『カラム』の記事は、創刊号から停刊号まで全てジャウィ(アラビア文字を改変したマレー・インドネシア語の表記法)で書かれていた。マレー・インドネシア語はかつてジャウィで書かれていたが、旧オランダ領(現インドネシア)では20世紀に入るとローマ字での表記が一般的となり、旧イギリス領(マラヤやシンガポール)でも1960年代までには多くのマレー語刊行物が表記をジャウィからローマ字に切り替えていった。そのような状況にあって、『カラム』は1969年の停刊まで一貫してジャウィで発行を続けた珍しい雑誌である。マレー語教育の普及とマレー語メディアのローマ字への切り替えに伴い、マラヤやシンガポールではローマ字表記のマレー語メディアが非ムスリムにも読者層を拡大していったが、それと対照的に『カラム』は読者層を事実上ムスリムに限定していた。

『カラム』の読者の大多数はシンガポールまたはマラヤに在住するムスリムだったが、記事の執筆者にはマラヤやシンガポールだけでなくインドネシアの著名なムスリム知識人も含まれ、インドネシアや他の東南アジア諸国のムスリム社会の情勢に関する記事も多く掲載されていた。また、エジプトで学ぶ留学生の寄稿などを通じて中東のイスラム思想が誌面で積

極的に紹介された。さらに、エドルスが中心になって1956年にシンガポールでムスリム同胞団が結成されると、『カラム』は同団体の事実上の機関誌となった。

このような特徴を持つ『カラム』が刊行されていた1950年代から60年代にかけての時期は、シンガポール、マラヤ(マレーシア)、インドネシアのそれぞれにおいて、独立により国家制度を整備したものの、欧米型の議会制民主主義をそのまま適用することの限界が認識された時期でもあった。ただし、この時期はその後訪れる「開発の時代」の準備段階として位置づけられ、この時期に積極的な意味を与えて分析の対象にすることは十分に行われてこなかった。

『カラム』は当時の国境を超えたイスラム主義の思想や運動を知ることができる貴重な資料であるが、本共同研究によって紹介されるまで研究上の利用がほとんどなされていなかった。その理由は、『カラム』がジャウィで書かれているために利用しにくかったことに加え、政治指導者や宗教指導者を厳しく批判した『カラム』が図書館等に体系的に収集されていなかったことが挙げられる。

そのため本共同研究では、各地の図書館・文書館等に分散して所蔵されている『カラム』を収集して1つの資料群とした上で、全記事をローマ字に翻字して、ジャウィ表記の誌面とともに公開することで研究者および一般利用者の便に供するプロジェクトに取り組んだ。

『カラム』は山本博之がシンガポール国立大学図書館、マラヤ大学ザアバ記念図書室などで収集した。2009年度に京都大学地域研究統合情報センター(京大地域研、現東南アジア地域研究研究所)の雑誌記事データベース・プロジェクトの一部として『カラム』誌面のデジタル化および記事見出しのローマ字翻字を行い、ローマ字で記事見出しを検索して当該誌面を呼び出すことができるデータベースを作成・公開した。

2009年度より「ジャウィ文献と社会」研究会が組

織され、同研究会による『カラム』の記事本文の翻字作業が進められた。2011年度からは京大地域研の地域情報学プロジェクト(雑誌データベース班)に位置付けられ、マレーシアの出版社クラシカ・メディア(Klasika Media)との提携により、『カラム』の全記事をローマ字翻字し、検索可能なPDFファイルをジャウィ版と同様のレイアウトにして作成した。ローマ字翻字作業は2016年度に完了し、本文中の単語の検索から当該誌面を呼び出せる「カラム雑誌記事データベース」を公開した。

『カラム』の連載・コラム記事のうち投稿による読者の質問に『カラム』が回答する「千一問」を取り上げ、2015年度より「千一問」の質問と回答の日本語訳を進め、各年度の論集『カラムの時代』に掲載した。日本語訳の作成では坪井祐司が全体を訳出し、光成歩が内容と表現を検討し、研究会メンバーが確認して訳文を確定した。本論集に掲載した第198号～第228号をもって「千一問」の全記事の日本語訳が完了する。

研究会では、『カラム』の記事をテーマごとに分析する研究ノートを発表するとともに、機械処理によって『カラム』の内容を捉える方法についての研究にも取り組んできた。本論集では、それぞれのテーマに即した研究ノートを掲載するとともに、デジタル人文学の観点からこれまでの取り組みを整理し、今後の共同研究の方向性を考える素材を提供している。

本研究の実施にあたっては、京都大学東南アジア地域研究研究所共同利用・共同研究拠点「地域情報資源の共有化と相関型地域研究の推進拠点」(CIRASセンター)の公募共同研究「東南アジアのムスリム社会の近代化とジェンダー規範の変容」(研究代表者:光成歩)および科学研究費助成事業若手研究「多宗教社会とムスリム女性:脱植民地化期のマレー語月刊誌『カラム』の記事分析より」(研究代表者:光成歩、課題番号:20K13204)の助成を受けた。